

アドルフ・フォン・ハルナックのルター理解

加 納 和 寛

はじめに

アドルフ・フォン・ハルナック (Adolf von Harnack, 1851-1930、以下、父のテオドシウス・ハルナックと区別するためにアドルフと表記) は 19 世紀から 20 世紀の転換期における自由主義神学を代表する歴史神学者として理解されることが多いが、教派的視点から言及されることは少ない。しかし当時の学术界のみならず、政治、社会、文化に対して今なお「ただフリードリヒ・シュライアマハーとのみ比較され得る¹」と評される広範な活動を展開したアドルフにはプロテスタンティズム、カトリシズム、ルター、メランヒトンなどを主題とした著作も見受けられる。特に 1917 年に出版された『マルティン・ルターと宗教改革の基礎づけ (*Martin Luther und die Grundlegung der Reformation*)』は 1928 年までに 11 万部が発行された²。他方で、一般にアドルフの主著とされており、広範な反響を惹起した『キリスト教の本質 (*Das Wesen des Christentums*)』の発行部数は 1900 年の初版以降、1927 年の時点で 7 万 3 千部である³。また、最晩年の著書『マルキオン (*Marcion*)』は現在のマルキオン研究に影響を与え続けているが、アドルフが同書においてマルキオンを「最初のプロテスタント」と呼び⁴、相当程度の評価を下していることは、アドルフのルター理解との関連から考察されるべきであると提案される⁵。あるいは親友 M・ラーデ (Martin Rade, 1857-1940) に宛てた書簡の中で、アドルフは「歴史の栄光および我々が我々であるすべてのもの」は「思弁に左右されるのではなく、歴史上のさまざまな人格と親しみ、それによって豊かになる」のであると述べ、アドルフにとってそうした人格の持ち主とは、

1 Johann Hinrich Claussen, Adolf von Harnack, in: Friedrich W. Graf (Hrsg.), *Klassiker der Theologie (Band 2)*, München 2005, S. 141. (安酸敏真訳「アドルフ・フォン・ハルナック」『キリスト教の主要神学者 下 リシャール・シモンからカール・ラーナーまで』教文館、2014 年、174 頁。)

2 Adolf von Harnack, *Martin Luther und die Grundlegung der Reformation*, 106.-110. Tsd. Auflage, Berlin 1928, vgl. Walther Köhler, *Martin Luther und die Grundlegung der Reformation*. 106.-110. Tsd 1928, in: ThLZ, 24 (1928), S. 573. なお ThLZ の同記事では 1928 年版が計 120 ページと紹介されているが、64 ページの誤りである。

3 Wolfram Kinzig, Harnack heute. Neuere Forschungen zu seiner Biographie und dem „Wesen des Christentums“, in: ThLZ, 126 (2001), S. 475.

4 Adolf von Harnack, *Marcion, das Evangelium vom fremden Gott: eine Monographie zur Geschichte der Grundlegung der katholischen Kirche. Neue Studien zu Marcion*, Leipzig ²1924 (Darmstadt 1985), S. 198.

5 Vgl. Agnes von Zahn-Harnack, *Adolf von Harnack*, Berlin ²1951, S. 399f.

「キリスト以降ではアウグスティヌス、ルター、ゲーテ、カーライルだけである」としている⁶。

いみじくもアドルフがルターをこうした人物たちとともに列挙していることは、アドルフのルター理解が多角的であると同時に様々なプリズムを通して構築されていることを示唆している。『マルティン・ルターと宗教改革の基礎づけ』の冒頭は次の通りである。

その死の 11 日前、ゲーテはある友人にこう語っている。「我々は、我々にとってルターと宗教改革から被っている恩恵のすべてがどれほどのものか、何もわかっていない。我々はその源泉に立ち返り、その純粋な意味でのキリスト教を把握することが可能となったのだ。我々は再び神の地平に確固として立脚する勇気を持ったのである。福音がキリスト教の光を輝かせるように、キリスト教の高みと道徳文化に関する精神文化は日進月歩であると言えるかもしれないが、人間精神は閉じこもったままである⁷」。

別言すればルターの改革は「還元 (Reduktion)」であり、「純化」と「自己回帰」であるとアドルフは繰り返す⁸。こうした見方はアドルフに限るものではない。問題はこの命題がアドルフにとって前提であるのか、それとも彼の歴史研究から導出された結論なのかである。この問題は宗教改革が「最も偉大で、祝福に満ちた運動であった⁹」と肯定されていること、「キリスト教宗教の歴史において、私たちは、あの改革以後新しい段階を経験していない¹⁰」という彼の歴史観にも同様に問うことができる。

また、アドルフの晩年に起こったいわゆるルター・ルネサンスは、それまでのルター理解を大きく変える出来事であった。この潮流を代表する神学者のうち、K・ホル (Karl Holl, 1866-1926)、E・ヒルシュ (Emanuel Hirsch, 1888-1972) らはアドルフに直接学んだ経験を持つ。特にホルはアドルフの直接指導を強く受け、後にベルリン大学神学部の同僚となるが、アドルフとホルそれぞれのルター理解における相互の影響に関してはなお議論の余地がある。

6 Johanna Jantsch (Hg.), *Der Briefwechsel zwischen Adolf von Harnack und Martin Rade: Theologie auf dem öffentlichen Markt*, Berlin 1996, S. 207.

7 Harnack, *Martin Luther, a. a. O.*, S. 3, Johann Wolfgang Goethe, *Sämtliche Werke, 2. Abteilung, Band 12*, Berlin 1999, S. 39, vgl. Johann Peter Eckermann, *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens: herausgegeben von Heinz Schlaffer*, München 1986, S. 695. なお、ハルナックによる引用は厳密なものではなく、要約に近い。

8 Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, Herausgegeben von Claus-Dieter Osthövener, Tübingen ³2012, S. 152. (深井智朗訳『キリスト教の本質』春秋社、2014年、284頁。)

9 *Das Wesen des Christentums, a. a. O.*, S. 151. (前掲書、282頁。)

10 *Das Wesen des Christentums, a. a. O.*, S. 167. (前掲書、313頁。)

1. テオドジウス・ハルナックとルター・ルネサンスのあいだ

いわゆるルター・ルネサンスの全体像については意見が分かれるが、多くはホルの 1910 年の論文「ルターのローマ書講解：救済の確証への問いを特に考慮して (Die Rechtfertigungslehre in Luthers Vorlesung über den Römerbrief mit besonderer Rücksicht auf die Frage der Heilsgewissheit)¹¹」がその端緒とされる。特にホルは第一次世界大戦後の 1921 年に刊行された『教会史論文集 第一巻 ルター (Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, Band 1, Luther)¹²』によって、ルターの宗教観は良心に力点を置いたものであると神学的、教会的、文化的に論証しており、このことはアドルフとの相違を決定的にし、ホルをしてアドルフの「失われた息子 (verlorener Sohn)」とすることになったと評される¹³。

H・アッセル (Heinrich Assel) はルター・ルネサンスに先行するルター研究者として、アドルフの父テオドジウス・ハルナック (Theodosius Harnack, 1816/17-1889、以下テオドジウス) を挙げる¹⁴。テオドジウスの神学プログラムはエアランゲン学派の線に立っており、そのことは非歴史的聖書釈義、経験神学的な信仰確信の教理、信仰告白を同じくする者のみによる国民教会の提唱に表わされている¹⁵。その著書『ルターの神学 (Luthers Theologie)¹⁶』はひとりルター個人の研究に留まるものではなく、ルター派の神学、特に新ルター主義の信条主義に立脚するものとして理解される¹⁷。たとえば「ルターは律法を一貫して直接的に神に帰する。律法とは神の御旨の表れであり、神がそうであるように不変で全能なものである。……律法とは、神と人間との基本的関係を創造によって、創造のうちに定めたことの表れである¹⁸」とする律法観は、福音との択一性よりも両立性に力点が置かれており、むしろ和協信条の光の下で考察の方が適

11 Karl Holl, „Die Rechtfertigungslehre in Luthers Vorlesung über den Römerbrief mit besonderer Rücksicht auf die Frage der Heilsgewissheit“, in: ZThK 20 (1910), S. 245-291.

12 Karl Holl, *Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, Band 1, Luther*, Tübingen 1921.

13 Heinrich Assel, Zorniger Vater - Verlorener Sohn, Harnacks Beitrag zur Lutherrenaissance zwischen Theodosius Harnack und Karl Holl, in: Kurt Nowak u. a. (Hg.), *Adolf von Harnack: Christentum, Wissenschaft und Gesellschaft*, Göttingen 2003, S. 71. ホルは 1889 年から学生としてハルナックに師事し、1894 年からプロイセン学術アカデミー教会教父委員会でハルナックの活動を助け、1906 年からはベルリン大学教会史担当教授としてハルナックの同僚となった。なお、両者の好意的な内容の往復書簡はルター・ルネサンス後も続いており、関係が断絶したわけではない (vgl. Heinrich Karpp (Hg.), *Karl Holl (1866-1925) Briefwechsel mit Adolf von Harnack*, Tübingen 1966, S. 74-76)。

14 Heinrich Assel, a. a. O., S. 69-83.

15 Vgl. Heinrich Assel, a. a. O., S. 71.

16 Theodosius Harnack, *Luthers Theologie: mit besonderer Beziehung auf seine Versöhnungs- und Erlösungslehre*, 2 Bde, Erlangen 1862, 1886.

17 Volker Drehsen, Konfessionalistische Kirchentheologie. Theodosius Harnack. 1816-1889, in: *Profile des neuzeitlichen Protestantismus (Bd.2) Kaiserreich. T.1.*, (Hrsg.) Friedrich W. Graf, Gütersloh 1992, S. 150.

18 Theodosius Harnack, a. a. O., S. 491, 492.

切であろう¹⁹。あるいは繰り返し語られるところのルターが直観したとする「律法において何が義しく、あるいは何が義しくないかを語った神による義認²⁰」および神とは「熱情と恵み²¹」の神であるといったアンビヴァレントな神観は、教会への自由主義あるいは民族主義の影響、文化闘争をめぐる統制といった教会の実践面での混乱に対するテオドジウスの間接的批判であると理解され²²、とりわけ神の熱情（怒り、Zorn）はルターにとって宗教的、道徳的に不可欠であったと主張したことはリッチェル学派への対抗的意味合いがあったと受けとめられる²³。

こうした文脈を脇に置き、議論のいくつかのトポスにのみ注目する場合、ホルのルター理解は相当程度テオドジウスの線にあると見ることも可能である。すなわちルターの神学における良心の位相²⁴、神秘主義的傾向を認めつつの汎神論的要素の排斥²⁵、畏れと信仰の緊密性の主張は²⁶、テオドジウスからホルへの息吹を感じるに充分であ

19 Vgl. Konkordienformel, VI, 15. 「ここで律法という言葉は一義的に、神の変わることをないみこころという意味であり、人間がそれに従って生活の中で身を持すべきもののことである」（石居正巳訳『和協信条・根本宣言』信条集専門委員会訳『ルーテル教会信条集』聖文舎、1982年、841頁）。

20 Theodosius Harnack, a. a. O., S. 97.

21 Theodosius Harnack, a. a. O., S. 138.

22 Vgl. Heinrich Assel, a. a. O., S. 71f. V・ドレーゼン（Volker Drehsen, 1949-2013）はテオドジウスのルター理解をむしろこうした二つの潮流、すなわち E・ヘンクステンベルク（Ernst Wilhelm Hengstenberg, 1802-1869）、F・シュタール（Friedrich Julius Stahl, 1802-1861）、E・フシュケ（Eduard Huschke, 1801-1886）らに代表される、同時代の教会政治的教会論にルターを読み込む形式、および 1848 年革命の刺激を受けつつ自由民主主義的教会論を標榜する「プロテスタント同盟（Protestantenverein）」の神学的支柱であった D・シェンケル（Daniel Schenkel, 1813-1885）、R・ローテ（Richard Rothe, 1799-1867）、C・ブンゼン（Christian Carl Josias Freiherr von Bunsen, 1791-1860）らのプログラムも断固として斥けているとしている（Volker Drehsen, a. a. O., S. 150）。

23 Vgl. Jan Rohls, *Protestantische Theologie der Neuzeit, Bd. I: Die Voraussetzungen und das 19. Jahrhundert*, Tübingen 1997, S. 837. これとは異なる見方として、H・ボルンカム（Heinrich Bornkamm, 1901-1977）はテオドジウスのルター研究を「十九世紀における最も重要な、いや厳密に言えば唯一の神学的ルター論」と高く評価しつつも「彼はルターの思想を思慮深く心をこめて再構成することに仕事を制限し、時代の諸問題にコミットしなかった」上に「ルターや一般に神学に向けられた問いをまったく取り上げなかった」としている（Heinrich Bornkamm, *Luther im Spiegel der deutschen Geistesgeschichte: mit ausgewählten Texten von Lessing bis zur Gegenwart*, Heidelberg 1955, S. 48, 谷口茂訳『ドイツ精神史とルター』聖文舎、1978年、102-103頁）。

24 「彼（ルター）の神学とは確信と良心の神学であり、信ずるに足る確かな恵みとその確かな信仰の神学である」（Theodosius Harnack, a. a. O., S. 59.）、「ルターの宗教とは、その語のこの上なく明らかな意味において、良心宗教である」（Karl Holl, a. a. O., 1921, S. 35）。

25 「神秘主義のこうした側面はルターに抗しがたい魅力であった。なぜなら彼は既に遠く離れた神の優位性が罪人にとって何を意味するかを幾らか経験していたからである。それはまた彼にとって自らを滅びへと導く尽きない罪責の感情を呼び起こしていたが、それはまったくもって神秘主義的な種類のものだった。それは和解と義認を必要とするあらゆる『確信に満ちた自己絶望（vertrauensvolle Selbstverzweiflung）』につながるものであったが、同時にルターは次のことも明瞭かつ確かに把握していた。すなわちそれは神秘主義を脅かしもするが否定もしない汎神論の魔術に対する解毒剤と予防薬でもある」（Theodosius Harnack, a. a. O., S. 53f.）、「まず第一にルターは、神秘主義的なもののなかにはいりこんでいる汎神論的なものを初めから斥けた」（Karl Holl, a. a. O., 1921, S. 36）。

26 「ルターがむしろ望んだのは、我々が神を両面性あるものとして、またそれを持ち続けているものとすること、それはちょうど神への正しい信仰が両面性を孕んでいるのと同じである。つまり、畏れと信頼である」（Theodosius Harnack, a. a. O., S. 136）。「神への畏れはこのような宗教への第一歩である。第一歩ではあるが、まだ宗教そのものではない。真の宗教は、ルターにとっては、人間が神と一体となるとときである」（Karl Holl, a. a. O., 1921, S. 60）。

る。民族主義に距離を置き、神概念への集中を提示したテオドジウスのルター像は、第一次世界大戦の敗戦による民族主義的ルター理解の退潮の中で個人的敬虔性と神体験に着目したホルのそれによって再び姿を現したと言えるかもしれない。それでもテオドジウスをルター・ルネサンスの一人と見ることは難しい。テオドジウスは 20 世紀初頭になってから新たに発見されたルターのローマ書講解（1515/16）等の草稿を知らなかったし、ホルの内省的で情熱的に描かれる、いわゆる若きルターへの注目を、テオドジウスが示すところの非体系的ではあるが力強い教説の提唱者としてのルターの解説と単純に比較することは適切とは言えない。

その意味で両者の中間の位置をアドルフ・フォン・ハルナックが占めることが予想される。父が峻拒したリッチェル学派に属するとされるアドルフだが、重要な基本的姿勢のいくつかは決して父から遠くない。すなわち、神学の民族主義的傾向への慎重さ、教会の国家的統制への疑問、教権主義への明確な反対は、神学潮流における軸足の違いとは異なる視点から両者を緊密に結びつける。そこで次項ではアドルフのルター理解を取り扱うことによって果たしてテオドジウスとホルのあいだにアドルフがいると言えるかどうかの是非を問うことにする。

2. 「神概念」：テオドジウス・ハルナックとアドルフ・フォン・ハルナック

テオドシウスは同時代の自由主義傾向とルターを重ねる視点を示唆的に批判したとされるに留まるのに対し、アドルフはこうした視点を明晰に斥ける。『教義史教本 (*Lehrbuch der Dogmengeschichte*)』第 3 巻第 4 章「プロテスタンティズムにおける教義の出発点」の冒頭で、彼は次のように語る。

ルターのキリスト教に表現されるような宗教改革は、多くの観点から見て一つの古カトリック的、ないしは中世的な現象である。ところがそれとは反対に宗教改革の宗教的核心と見なされるものはそうではない。むしろ一つの新しい時代の精神におけるパウロ的キリスト教の再確立なのである²⁷。

歴史的視点からルターと宗教改革あるいはその現象的側面と核心的部分を分離しようとする試みは幾分の錯綜を含んでいる。アドルフはルター自身もまた「古カトリック的かつ中世的な現象」の側面を持つとしている²⁸。矛盾に思えるこの分析は、いわゆ

27 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, Tübingen ⁴1909, S. 809.

28 「彼がいた領域において、というよりも彼の本質のいくつもの深奥においてルターはある一つの古カトリック的かつ中世的な表れであった」(Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 811)。

る前期ルターと後期ルターの相違を認める方法論に帰せられるが²⁹、この点においてアドルフはテオドシウスともホルとも異なっている。テオドシウスとの直接的な関連は、特にルターの神概念に見出される。テオドシウスはキリストへの集中において「完全なる神的権力と権威を持つ神」であり、なおかつ「我々を思い、語り、振る舞う」神、また「神と神」、「キリストの外の神とキリストにおける神」との二重関係における神認識を提示したが³⁰、アドルフは「中世では暫定的なものと思なされた、主であり父としての神認識およびその神の守りへの信仰を、彼は実践的キリスト教の中心的事柄と見なし³¹」、「彼はただ福音においてのみ偉大であった。すなわち、キリストにおいて再び発見された神認識においてである³²」のであって、「キリスト的宗教とは、イエス・キリストにおいて自己を啓示し、その心を開いた生ける神への生ける確信にほかならない³³」とし、キリストの神認識にのみ力点を置いた。

これはアドルフにおけるルター理解の核心の一つと見ることができる。ルターは新しい教義の体系を構築したのではなく、還元によって「宗教を再確立した」のであり³⁴、「古い教義の改修者 (Restaurator des alten Dogmas)」にすぎない³⁵。アドルフはエラスムスおよびアナバプティストの神学者たちは近代精神と見るが、ルターはそうではない³⁶。「中世的な教会」が「人生、国家、家族のあらゆる面を専制支配していた」状態を終わらせたという意味で、アドルフはルターを中世から区別するが³⁷、これらは「還

29 「たしかに 1519 年から 1523 年頃までは宗教改革の頂点である。果たされるべきことすべて、つまり将来のあらゆる課題はこの時ルター自身によって掌握されており、実現は間近であると見えたのは奇跡的な摂理であった。……しかしすべてを成し遂げる人間は存在しない。継続的に働きをなすのであって、流星のように一瞬だけ輝くというわけではなく、その本性に定められている限界に立ち戻ることを余儀なくされるのである。ルターもまたそこへ立ち戻った」(Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 811)。

30 Theodosius Harnack, a. a. O., S. 111.

31 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 832.

32 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 812.

33 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 824.

34 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 824.

35 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 814. 「それまでより洗練され、より複雑であった理想のがらくたの下でほとんど注意を払われなかった、神の父としての摂理への従順かつしっかりとした確信、隣人愛ある職業における誠実を、彼は中心的事柄と見なした」(Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 832)。

36 「ルターをして新しい時代の人、姿を現し始めた時代の英雄あるいは近代精神の創始者とほめたたえるのはまったくもって一面的、いや言語道断な見方である。もしそうした英雄を見たければ、エラスムスとその同僚たち、あるいはデnk、フランク、ゼルヴェーデ、ブルーノといった人々のところへ行くべきである」(Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 810f)。デnk (Hans Denck, 1495?-1527) はおもに南ドイツおよびスイスで活動した宗教改革者。人文主義に基づく急進的な宗教改革を提唱し、再洗礼派の指導者の一人に目される。フランク (Sebastian Franck, 1499-1542) は当初ルター派の説教者となるが、ウルムで急進的な思想が異端視され、バーゼルに移って著述に専念した。ゼルヴェーデ (Servete) はミヒャエル・ゼルヴェトウス (Michael Servetus, 1509/1511-1553) のことと思われる。三位一体論を否定したためカトリック、プロテスタント双方から異端視され、ジュネーヴで火刑に処せられた。

37 Adolf von Harnack, *Martin Luther und die Grundlegung der Reformation*, a. a. O., S. 63.

元」による「人間を解放する単純化」であり、「力に満ちた集中」なのであって³⁸、ルターが「まず神の国とその義とを求めたので、それらは彼の『手に入った (zugefallen)』』とする³⁹。

このようにルターによる信仰論のキリスト論への還元こそが「中世から古代教会への回帰」を可能にしたとアドルフは見る⁴⁰。すなわち「真の十字架の神学 (die wahre theologia crucis)」を打ち立てたことがルターの教理史的意義であるとされる⁴¹。ルターが中世の思弁的神学および教義を解体し、アウグスティヌスの線を辿ってパウロへ回帰したとする見解は決して目新しいものではない。しかし内面的敬虔性を教義よりも優位に置く姿勢はむしろエイレナイオスやアタナシオスに近いことをアドルフは指摘する⁴²。特に非常なる還元はむしろアタナシオスとの親和性が注目される⁴³。ただしルターは単に古代へ回帰したのではなく、「キリストにおける啓示への信仰が、我々の至福の前提としてのみならず、客観的にも、また主観的にも唯一の有効因子 (wirksamer Faktor) として見えるよう」に試みた点は古代とは異なるとしている⁴⁴。

既に見たように、テオドジウスはルターの神学的命題の中にアンビヴァレントな二重性を看取したが、アドルフはルターの全活動に「思惟と行為」、「理論」と「生活」「実践」の「二重課題」を見出し、なおかつこれを「ルター神学における克服できなかった要素」と呼ぶ⁴⁵。つまり経験と思弁、歴史と超越、実践と理論を弁証する総合体系の構築を前提としての発言であり、その意味では、キリスト教とは内面的宗教と外面的道徳の総合体系であり、宗教改革の意義はそこにあるとするリッチェルの考えをアドルフは高

38 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 824.

39 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 834.

40 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 863.

41 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 862. なお、昨今の「ルターの十字架の神学」に注目する眼差しはこうした前提を持たずにルターが経験神学へ回帰したことをもっぱら評価するものが見受けられる。たとえば、A・E・マクグラス (Alistair E. McGrath, 1953-) は「理論的思弁に優先する」ところの「経験を通して十字架を見ること」がルターの十字架の神学の神髄にほかならないとし、中世後期のキリストの苦難への観想とキリストの十字架の倫理的・靈的影響の線上にルターを置き、「理論と経験の緊張」をむしろ否定的に斥けて、いわゆるあれか・これかによって「ルターの十字架の神学」像を提示する (Alistair E. McGrath, *Luther's Theology of the Cross, Martin Luther's theological breakthrough*, 2nd ed., Wiley-Blackwell, 2011, pp. 207-211, 230-232, 鈴木浩訳『ルターの十字架の神学』教文館、2015 年、252-255、273-274 頁)。

42 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 862. ハルナックの理解によれば、アウグスティヌスは自身の霊性を使いこなしておらず、教化 (auferbauen) というよりも活気づけ (anregen) したにすぎないとする (Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 824)。他方で宗教改革の教義史の端緒はアウグスティヌスの敬虔性の内面史に基礎付けられているとしている (Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 862)。

43 古代において既に始まっていたところの、度を越した思弁化に対し最も偉大な還元をなしたのはアタナシオスであり、後の宗教改革を念頭に置くと、アウグスティヌスと比肩できるのはアタナシオスのみであるとハルナックは評価する (vgl. Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 2, Tübingen 1909, Neuausgabe 2015, S. 21f)。

44 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 863.

45 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 863.

く評価する⁴⁶。しかしリッチェルが考慮に入れなかったルターの終末論に関するプログラム、すなわち見えざる神の国の到来への還元を提示することで、アドルフはリッチェルの線から一步を踏み出していると言える⁴⁷。それはテオドジウスにも全く欠けていたものであった⁴⁸。

3. 「良心の宗教」：アドルフ・フォン・ハルナックとカール・ホル

アドルフによればルターの行った「あらゆる還元は宗教の再確立にほかならない⁴⁹」。具体的にはイエス・キリストご自身であるところの神の言葉および信仰生活もしくは神への信仰に還元される⁵⁰。イエス・キリストは歴史における啓示そのものであり、罪のゆるしの確信は人を創り変え、新しくすることによって自由へと解放する⁵¹。ここで言う自由とは「空白への解放」でもなければあらゆる主体性を発揮してよいという「許可証」でもなく、他の誰でもなくただ神のみが我らにおられるという確信における、神による世の支配への解放である⁵²。この自由は根本的には個人の内面的自由と神の国の見えざる連帯との両方を意味するのであって、その点ではリッチェルの「義認と和解」理解から遠くないものの、ローマ・カトリック的な教会権威の否定と神の

46 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte Bd. 3*, a. a. O., S. 831. もっとも、テオドジウスがリッチェル学派を激しく拒絶していたことはよく知られている。『ルターの神学』は伝統的な教理命題のリストと対照した場合、しばしばその非体系性が言及されるものの、その内容においては既に述べた幾組の対立命題のほか、ルターの神秘主義的あるいは敬虔主義的傾向などについても弁証的に取り扱っており、その意味ではハルナック、さらにはリッチェルに遠くない。

47 「ルターが教会というものをどのように信じていたかは既に述べた。すなわち、聖徒の共同体、言ってみれば信仰者たちの共同体、それは神の言葉によって聖霊が呼び集めたものであり、聖霊によって照らされかつ聖別され、正しい信仰に立つ福音によって一步一步構築され、神の子たちに約束されている輝かしい未来を慰めと喜びのうちに待ち望み、その日が来るまで互いに愛をもって、神が遣わされたそれぞれの持ち場にあって仕え合うところである」(Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte Bd. 3*, a. a. O., S. 827)。

48 テオドジウスはリッチェルの「神の国」概念を「神と世との和解ではまったくなく、我々が神と和解することのみであると言わざるを得ない」と痛烈に批判する一方、ルターの「神の国」概念は終局的かつ個人的であるが「非神学的形姿 (keine theologische Gestalt)」であるとの分析に留まり、それ以上の言及はない (Theodosius Harnack, a. a. O., S. 18)。

49 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte Bd. 3*, a. a. O., S. 824.

50 1881年にC・ルートハルト (Christoph Ernst Luthardt, 1823-1902) へ宛てた手紙の中で、ハルナックは「啓示のキリストを中心に立てなければ、我々の義認の信仰はカトリシズムによってではなく、我々の信仰に応じたキリスト論による不安定な揺れに常に脅かされることになる」と述べている (Uwe Rieske-Braun (Hg.), *Moderne Theologie: der Briefwechsel Adolf von Harnack, Christoph Ernst Luthardt, 1878-1897*, Neukirchener 1996, S. 33)。1926年の論文「ルターの宗教改革の宗教史的意義 (Die religionsgeschichtliche Bedeutung des Reformation Luthers)」においても、神の言葉と信仰への還元は内面的のみならず外面的にも同等の高い価値を持つとしている (Adolf von Harnack, „Die religionsgeschichtliche Bedeutung des Reformation Luthers“, in: *Adolf von Harnack als Zeitgenosse: Reden und Schriften aus den Jahren des Kaiserreichs und der Weimarer Republik (Teil. 1.): Der Theologe und Historiker*, hg von dems., Berlin 1996, S. 329-342, hier, S. 338)。

51 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte Bd. 3*, a. a. O., S. 825f.

52 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte Bd. 3*, a. a. O., S. 826.

国の終末論的理解が相俟って、具体的な見える教会には力点が置かれ⁵³。なぜなら、アドルフによれば神の言葉こそが教会を形成し、福音を宣教するのであって、その逆ではないからである⁵⁴。同時にアドルフは「慰め」を確信と並ぶものに位置づける⁵⁵。ゆるしの sacrament を排した以上は、神の言葉と信仰そのものが現在する慰めのすべてとなる⁵⁶。

ここまで見てきたように、アドルフはルターに、見える教会と見えざる教会、神の国とこの世、個人の確信と他者と共有可能な信仰との弁証的關係を強いて見出そうとせず、むしろ否定さえしてその二重性を提示するに留まる⁵⁷。しかし神学命題上それは両性論に未到達の位置に二重写しに見えるアポリアであるとの批判を免れない⁵⁸。しかしこれこそがアドルフの福音理解、ひいてはルター理解にほかならない。アドルフによれば、福音を行うこととは「私たちの良心に従って、そして隣人のために最善のことであると思われることを行うことによって……現世の諸關係を確立する」ことであり、「福音はただひとつの目的と、ただひとつの意識とを知っているだけ」であり、「それは物質に関係することではなく、人間の魂の問題なのである」⁵⁹。そして「ルターはその新しい時代の生き方の中で……あらゆるこの世の労働との関連でいえば正しい良心を回復した」のであり、それは彼が「宗教を真剣に、そして深く受け止めたから」とする⁶⁰。

つまり、アドルフのプログラムではそもそも福音とは一元的な内的良心の宗教的使信にほかならない。信仰者の外的行動は、「良心の自由」を経験した個人の「聖なる義務」と定義される⁶¹。そして義認とは「その良心において打ち碎かれ、それゆえに神を見失った哀れな人が、ただ至高において神ご自身に満たされ、平安を見つけること」とルターは説いたとする⁶²。ただし、アドルフにおけるルターの良心理解はここまでであり、アドルフのプログラムにおいては既に見たように信仰への還元が中心を成しており、良心は動機というよりも結果に属する印象の強い要素に留まる。

一方でホルは次のように規定する。「ルターの宗教は、その語の最も印象的な意味

53 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 827f.

54 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 827.

55 „Die religionsgeschichte Bedeutung des Reformation Luthers“, a. a. O., S. 335, 338.

56 „Die religionsgeschichte Bedeutung des Reformation Luthers“, a. a. O., S. 338.

57 「(宗教改革が) 西欧世界で優勢な教義的キリスト教の二元論および実践的キリスト教の自己判断またその生活態度を止揚させたことにより、福音主義信仰は教義的立場へたどり着いたのである」(Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 862)。

58 Heinrich Assel, a. a. O., S. 75.

59 Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, a. a. O., S. 71. (深井訳、138 頁。傍点は訳者、原著では強調表記。)

60 Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, a. a. O., S. 158. (深井訳、295 頁。)

61 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 826.

62 Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* Bd. 3, a. a. O., S. 845.

において、良心宗教である。その強い訴求性かつ人格的限界性、そうしたことに伴うすべてのこととともに、良心宗教であると言える⁶³。「良心経験に基礎づけられたことにより、その思考体系において神概念が優位に立ったのは自然なことであった⁶⁴」。アドルフにおいてルターの思想の核心に据えられていた神概念は結果へと移動され、代わって良心がその位置を占めることになった。それは若きルターへの傾斜ではなく、かえってルターの思想の統一性を強めるとホルは考えた⁶⁵。ルターの神概念が描く表象とは「彼によって実際に経験されたものの忠実な再現」であり、このルターが「最終的に見出したもの」とは「最初の位置に戻された」ものである⁶⁶。それまで非組織的に提示されていた諸命題は良心と体験によって一つにされた。それは確かにハルナック父子が志向しつつも、自らの手では遂行しきれなかったものであった。

おわりに

テオドジウス・ハルナック、アドルフ・フォン・ハルナック、カール・ホルを単に「ルター研究」の名の下に同一線上に置くことは適切ではない。テオドジウスの提示したルター像は今日から見ると、後に形成されたルター派神学のプリズムを通して、実践的教会論を前提としつつ体系的な教理の創始者とする意図が明白である。その意味でテオドジウスは決してルター・ルネサンスに属さない。ホルによるルターとルター派神学の慎重な分離、若きルターへの力点はテオドジウスとの決定的な差異と見なさなければならない。しかしながらルターの経験に基づく内面性への着目と神秘主義的傾向への冷静な批判、神の怒りと憐れみの均衡、神概念とキリストへの集中などの諸命題、並びに歴史主義との距離、二王国論に対して弁証的アプローチを採らない解釈等は確かにホルへの刺激を与えたと見てよい。

その一方で、ホルのルター研究の核心となる良心宗教の概念はテオドジウスには希薄であり、むしろアドルフにその萌芽を見る。リッチェル学派としての神の国概念、ただし終末論が相当程度色濃い神の国概念においては、良心の位相は結果に属したが、テオドジウスと同じくリッチェル的思考を斥けたホルは良心を中心概念に据えた。その意味ではアドルフもまたルター・ルネサンスに属さない。ホルが良心と体験をもってルターの使信を統一したことは、アドルフのプログラムとは別物であると言わなければならない。アドルフがルターを近代以前、中世末期の人間としたように、アドルフ・

63 Karl Holl, a. a. O., S. 35.

64 Karl Holl, a. a. O., S. 37.

65 ホルはこの理念を1908年に公刊された、1515/16年のローマ書講解原稿によって強めることができると考えた (Johannes Ficker (Hg.), *Luthers Vorlesung über den Römerbrief, 1515/1516*, Leipzig 1908)。

66 Karl Holl, a. a. O., S. 38.

フォン・ハルナック自身もまた 20 世紀への転換期において、新時代のルター・ルネサンス以前の神学者であった。

【Abstract】

Adolf von Harnack and his View of Martin Luther Studies

KANO Kazuhiro

Adolf von Harnack was the most famous church historian in Germany at the turn of the 20th century. It is rarely mentioned that he was a Lutheran theologian; thus, gaining insight about Martin Luther is important.

His father, Theodosius Harnack, from the perspective of the Erlangen School and Lutheran denominational theology, conducted research on Luther with the purpose of finding a balance between the law of the Old Testament and the gospel of New Testament. Theodosius's view is deemed to be the opposite of aspects such as liberal and nationalistic tendencies, which the German evangelical church had followed in the middle of the 19th century, as well as the state's control of the church, which was related to the culture struggle ("Kulturkampf") in Germany. Adolf von Harnack, on the contrary, only highlighted Luther's concept of God in Christ. Adolf emphasized faith and Reduction to Paul, reestablishment of "religion". It is nothing other than living confidence in the living God. His program is monistic, not dialectical. Adolf did not attempt to develop a comprehensive system.

Adolf basically placed Luther in the late middle ages. For him, Luther was neither a German national hero nor a founder of the modern age. Rather, Luther was the restorer of old dogma. Adolf did not attempt a dialog between the visible and invisible church, the Kingdom of God and this world, and individual confidence and community faith. He was of the opinion that it is aporia, which has not reached dyophysite. However, at the same time, Adolf also stated that the difference between Luther and the middle Ages was the result of the revival of religion, the recovery of conscience. He considered freedom of conscience to be acquired by Luther. However, Karl Holl expressed the view that the establishment of conscience religion is at the center of Luther's thought. As a result, the dispersed propositions were united by conscience and experiences.

Indeed, Holl clearly asserted the unification of Luther's thought that Theodosius was unable to do. However, that is not complete systematic theology. I could say that Luther's "Kerygma" unity was presented. This view is certainly evident in Adolf. However, he does not belong to the Lutheran Renaissance.